

日本弁理士会中国会 設立20周年記念講演会 記念祝賀会

イベントレポート



弁理士×デザイン！ 至高のコラボで見た「知財」の新しいカタチ

「弁理士」と聞くと、法律、書類、難しい……そんなお堅いイメージを持っていますか？2026年1月30日、広島で開催された日本弁理士会中国会設立20周年記念講演会・記念祝賀会は、そんなイメージを軽やかに覆すものでした。テーマは「デザイン」。

会場となったホテルグランヴィア広島には、学生やデザイナー、教育関係者など、一般公開の講演会を楽しみにしてきた来場者がずらり。用意された120席はあっという間に満席になり、会場は熱気に包まれました。

「知財×デザイン」という至高のコラボレーションで何が語られたのか？驚きと発見に満ちた当日の様子をレポートします。

アストラムラインが「黄色」である理由、知っていますか？

第1部のメインゲストは、広島の街づくりをデザインで支えてきた、株式会社GKデザイン総研広島代表取締役社長の彌中敏和氏。「デザインの軌跡と未来」と題した講演は、広島の人なら思わず身を引き出すエピソードから始まりました。



講演者：株式会社GKデザイン総研広島 代表取締役社長 彌中 敏和氏

広島市民の足、アストラムライン。あのシンボルカラーの「黄色」には、実は深い理由があったのです。彌中氏によると、広島の風景は豊かな緑や海（青）がベース。そこに補色である黄色を置くことで、生き生きとした風景を作りたかったそうです。

さらに驚いたのは、30年の時を経てリニューアルされた新しい車両の話。性能は劇的に進化しているのに、見た目の印象はあえて変えていないのです。「機能は上げて、風景としての記憶は変えない」。親子二代で乗っても変わらない安心感をつくる、長く愛されるインフラデザインの極意が語られました。

また、「モノを作ることはできるが、コト（体験）は作れない」という言葉も印象的でした。デザインによって何が起きるかはコントロールできないが、作り手が熱量を込めて「凄み」のあるモノを作らなければ「コト」は起きない。DX（デジタルトランスフォーメーション）が叫ばれる今だからこそ、人間特有の物差しが大切だと語り、会場の皆さんも熱心にメモを取っていました。

講演の終盤では、京都の嵐電（京福電鉄嵐山線）の車両デザインについて、こんな裏話も飛び出しました。

リニューアルのプレスリリースでデザインのスケッチを世に出した時、彌中氏は「昔の方が良かった！」という批判を覚悟していたそうです。ところがフタを開けてみると、ファンの方がそのスケッチをもとに模型を作ったり、擬人化した美少女キャラクターを描いたりし始めたのだそう。

「普通なら著作権の問題に言及したくなる場面かもしれませんが、我々が考えたものをファンが発展

させてくれたと感じた」そう語る彌中氏。知財というと「権利を守ること」ばかり考えがちですが、「共有して楽しむ」ことを助けるのも、デザインと知財の関係性なのかもしれません。

AIは「正解」を出すけれど、人間はあえて「間違える」

続くトークセッションは、さらに豪華なメンバーが集結しました。マツダ株式会社のデザインを統括する前田育男氏、特許庁の久保田氏、そして弁理士の森氏という、立場の異なる4名の対談を日本弁理士会中国会 会長 田中氏がファシリテーターとして進行了しました。



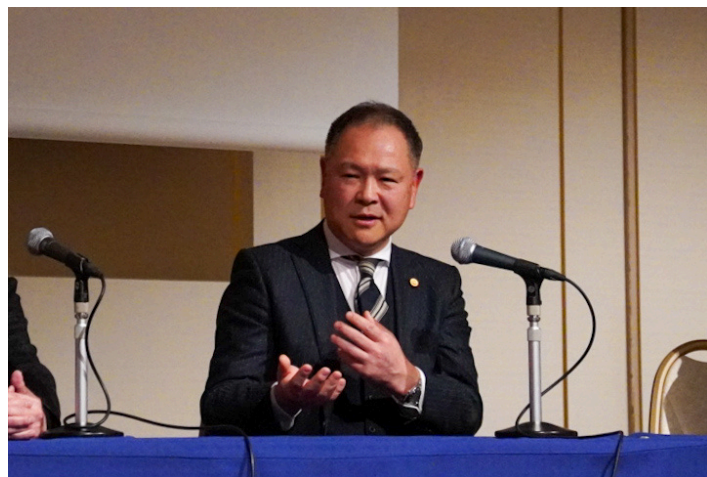
株式会社GKデザイン総研広島
代表取締役社長 彌中 敏和氏 (写真左)



マツダ株式会社 シニアフェローデザイン・
ブランドスタイル監修 前田 育男氏 (写真左)



特許庁 審査第一部 意匠課長 久保田 大輔氏
(写真右)



日本弁理士会 中国会 / 幹事 森 寿夫氏

ここで特に盛り上がったのが、「AIvs人間の感性」の話。マツダ株式会社の前田氏は、ロードスターのデザインを例に挙げこう語りました。「デジタルやAIは、数学的に正しい答えを出します。でも、人間が手で削り出したカーブは、数学的には“間違っている”こともある。だけど、そのゆらぎこそが、人間にしか出せない“深み”になるんです」

これには会場も「なるほど……！」という空気に。一方で、特許庁と弁理士チームからは「“デザインの空気感”を、どうやって法律で守るか？」という悩ましい課題も。「弁理士はただ書類を作る代行人ではない。クリエイターと対話して、その想いを守るための作戦を練るパートナーであるべ

き」。そんな熱い言葉が飛び交い、クリエイターと知財のプロが手を取り合う、頼もしい時間となりました。

伝統を五感で感じる「神楽」が響く祝賀会



熱気冷めやらぬまま突入した第2部は、お世話になった方々への感謝を伝える祝賀会です。ここでは「未来」を語った第1部とは対照的に「伝統」がテーマに。「AI時代だからこそ、人間が持つ“五感”を大切にしたい」という田中会長の挨拶の通り、会場を沸かせたのは広島が誇る伝統芸能「神楽」でした！

煌びやかな衣装、激しい舞、太鼓の音。参加者に八岐大蛇（やまたのおろち）が迫るシーンもあり、まさに「古き良きもの」と「新しい技術」が融合した、日本弁理士会中国会らしい一日となりました。

「デザイン」と「知財」。この二つは、実は密接に関わっています。今回のイベントを通じて感じたのは、「知財は難しい法律の話ではなく、私たちの生活や風景を守るための“武器”なんだ」ということでした。

新しい風景を作り出すデザイナーと、それを守る弁理士。このタッグが、これからの中国地方をもっとおもしろくしてくれそうです！